

金牛の鎖

中国財宝譚

道家で、各地の名山にあるという洞天福地の説と、民間伝承の洞中秘宝の説とが交錯するうちに、洞奥におかれた櫃中の銀一塊を入手する話や、洞穴の神に禱って食器その他の調度品を借用する話、さらには神に商売の資本を借用する「借元宝」の民俗風習ともなる。洞穴こそは、俗界と神霊界とを隔て、両世界を接ぐ門戸だった。

澤田瑞穂



澤田瑞穂（さわだみずほ） 1912年生。国学院大学高師部卒。天理大学・早稲田大学の教授を歴任。文学博士。専攻、中国文学。著訳書『地獄変』（法蔵館）『仏教と中国文学』（国書刊行会）『増補宝巻の研究』（国書刊行会）『中国動物譚』（弘文堂）『宋明清小説叢考』（研文出版）『中国の泰山』（講談社）『中国の民間信仰』（工作舎）『列仙伝・神仙伝』（平凡社）ほか。

平凡社選書83

金牛の鎖

——中国財宝譚——

1983年10月7日 初版第1刷発行

定 価 1500円

著 者 澤田瑞穂

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区三番町5番地

郵便番号 102 振替 東京 8-29639

電話 東京 (03)-265-0451

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社石津製本所

© 澤田瑞穂 1983 Printed in Japan

不良本のお取替えは直接読者サービス係まで
お送り下さい（送料は小社で負担します）

平凡社選書 83

金牛の鎖

中国財宝譚

澤田瑞穂

平凡社

財宝談義——序にかえて——

現実生活の中では、財宝などという、今はもういささか古風になったことばは殆んど使われることもないだろう。金銭や貴金属や寶石など、人間物慾の対象となるものは無数であるけれども、現代ではそれらを称して財宝とよぶことはないようだ。土地家屋などの不動産は別としても、財産の代表である金銭でさえも、それは実体をもつ黄金や白銀ではなくて、紙幣や株券や預金通帳に記された金額の数字にすぎないから、人々にとっては、それは手に取って撫摩するに価する宝あたとしての實在感はないのである。だから語彙としての「財宝」は辞書には載っていても、日常生活の中の生きた用語としては存在しないのである。

それでは、この語がまったくの廢語になっているかという、必ずしもそうではない。日常語ではないが、主として説話研究の方面ではかなり頻繁に用いられる語である。物慾の充足ということは、婚姻や誕生などと並ぶ人生の重要な主題だから、これが説話化されたものは、総じてこれを財宝譚とよぶ。すこし詳しくいえば財宝発見致富譚である。

財宝発見致富譚にもさまざまな類型がある。貧しい男が偶然に天与の財物入手するというような単純な型ばかりでなく、人間の運不運と幸不幸の不可思議を説く致富発跡と没落の物語もあり、ある

いは異郷から訪れた異類の美女との婚姻によって稀代の財富を得る物語もある。人間に富をもたらすものが、かつて生命を救ってやった可憐な動物であったり、または意外の妖怪変化であったりする。金銀そのものが世に現われんことを欲して精怪となってその存在を人に告げる話もある。中国の例でいえば宝精譚、すなわちわが宝化物の昔話である。その一類が銀人譚。富家の庫中に密閉された銀が童子の形を借りて逃亡し江湖を流浪するが、どこにも安住の地なく、結局は再び富家の庫にたち戻る。財は財のあるところに集まるという資本主義の原理を語るような話であるが、宝の精が黄金でも赤銅でもなく白銀の童子だったというのは、中国では由来銀本位制であって、銀製品を秤で量ればそのまま銀幾両と計算できたことの反映でもあろうか。

これらの財宝譚、財物という現実的なものを扱いながら、実はむしろ人間の願望を反映した空想とロマンの所産である。その空想浪漫性が、生臭いはずの世俗の話柄をして愉快なる庶民口承の文芸たらしめているのである。

財宝の話といえ、誰でもすぐ連想するのが例の埋蔵金物語であろう。実際にも都市の地下鉄工事やビル建築の基礎工事で、小判や小粒銀をザクザク掘り出したというようなことが新聞などで報道される。しかしこれは一つの事件であって伝説ではない。事件は一回きりでやがて忘れ去られる。

伝説として殊に有名なのは幕末に小栗上野介がどこかの山中に運んでひそかに埋めたという御用金

の話。これは例の「朝日さす夕日かがやく木の下に……」黄金千万両が埋めてあるぞという朝日長者型の伝説の亜型もしくは末流で、枝葉はあっても根のない浮説にすぎないのだが、これを真に受けて親子二代三代をかけて自家の持山を掘り続けているという話も聞く。一攫千金万金を夢みるという点では、一等一千万円の宝くじを買うよりもロマンがあるといえなくもないが、所詮は武蔵野の逃げ水にも似た幻影であり、小説『宝島』の空想を強引に現実化しようとする一種の愚人譚でもある。

中国にもこれに似た埋蔵金物語はあることはあった。たとえば張獻忠ちやうけんちゆうの埋蔵金という話。時は明末の天下擾乱期に、主として四川地方を劫掠して廻った流寇の巨魁張獻忠が、その掠奪した金銀の類を鑄潰して銀塊とし、これを成都錦江きんかうの水を塞せぎとめて川底に穴を掘り、銀を深く地下に埋めたのち、悉く土工を殺害して上を覆い、然るのちに水を放流して再発掘を不可能ならしめたという。このこと『蜀碧』や『綴寇紀略』などの野史に伝え、これを張獻忠の「銅金」というとある。

右の風説は永年にわたってその地方に伝えられていたものらしく、現に『清実録』文宗卷八九、咸豐三年三月の上諭にも、編修官陳泰初からの報告を録する。いうところによると、『明史』および『四川省志』に明末の流寇張獻忠が金銀数万を錦江の下に窖あなうめにしたとあり、かつ地方の居民が、かつて献忠の遺棄した銀を目撃したが、その色は黒暗であったという。その銀は官に帰し、なお藩庫に蔵せられていたと聞く。道光十八年には係官を派遣して調査せしめたが、その埋蔵の場所を確認できなかったので、やむなく中止したともいう。かくて上諭では、さらに風説を集めてその場所を探查し、手

段を講じて発掘するようと、なんと皇帝の名でもって宝さがしを指令している。しかし後世に至るまで張獻忠の埋蔵金が成都で発見されたという消息は聞かない。よしんば発見があったとしても、強慾な地方官がそれを正直に中央に報告するはずはあるまいなどと疑うまでもなく、これまた小栗上野介の埋蔵金と同類の朝日長者伝説にすぎなかったのではなからうか。

一方また匪賊乱兵の掠奪を予想して地中に銀を埋めこむ方策を講じたという話もある。朱介凡編『方言記事示例』の「莫奈何」の項によると、山西人はすこぶる理財にたけていて、財産保全のために「藏鏹^{ぎんぎょう}」をする風習があったという。伝説によれば、金銀をそのまま地下に埋めただけでは、やはり賊に発掘されるおそれがある。そこで銀錠を熔かし、地下に深い堅穴を掘って、これに熔かした銀液を注ぎ入れる。銀は凝固して一大銀塊となる。これを「莫奈何」と称する。その意味は、たとえ賊がこれを発見しても、あまりに巨大な銀塊だから運搬のしようもなく、ただ銀を見ながら莫奈何と歎息するというのである。これも誇張した作り話の一種らしいから真偽のほどは保証の限りでない。一説では、金銀は少量でも高価だから、これを無数の銅銭に換えて地下に貯蔵するともいう。銅銭ではカサが張るばかりだから、賊も掠奪を見合せるだろうというわけである。

こんな他愛もない埋蔵金物語を並べるのは、この「財宝談義」の本意ではなかった。本意は、説話の主題としての財宝と、その伝承の表裏および縁辺を窺ってみたいというにある。

すべて人間は金銀玉石を加工して貨幣または器具宝飾として秘蔵し、またはこれらを交易して生活するのであるが、その原材料は本来すべて地中・山中・溪谷中より採取したものである。すなわち財宝の資料はもと土中にあり、その原鉱や原石は、土地の精、山岳の靈が凝固して結晶したものである。しかもそれら財宝の精靈は、一転すれば地下または山岳の神靈そのものと考えられ、再転すればそれらの神靈によって管理せられ、幸運なる偶然の機会でもなければ俗人の目にふれることはない。神はその地域と財宝との領主である。この神靈がやがて人間の相^{すがた}をした神仙として具象化されると、その神仙の住居は山中の巨大なる洞窟と考えられ、その奥には金殿玉楼が連なり、さらにその奥の秘庫には無数の金銀宝玉が貯えられ、悪意の進入者を防ぐために、その秘庫の入口には怪竜猛獸が蟠踞して守衛するといふように考えられてくる。道家で、各地の名山にあるといふ洞天福地の説と、民間伝承の洞中秘宝の説とが交錯するうちに、たとえば、洞の奥におかれた櫃^{ひつ}の中の銀一塊を入手する話や、「借元宝」の民俗風習ともなるのである。洞穴こそは、俗界と神靈界とを隔て、かつ両世界を接^{つな}ぐ門戸だったのである。財宝譚にもよく山の洞穴が出るのはその理由による。

中国史の戦国末期、おそらくは秦漢の際に成ったとされる『山海経』は、現存する中国最古の地理書または山岳志と考えられているが、その書の記述者はもとより、何の目的をもつてあのような奇怪

な書を編したかは今もって明らかでない。前漢の史家司馬遷も『山海經』の書名を挙げながら、この書の性格またはその真偽については言及するところがない。さすが博覧の太史公も、この奇妙な古籍については断定を保留したものとみえる。

ところでこの書の最も古い部分とされる初めの五巻分すなわち南山經・西山經・北山經・東山經・中山經のいわゆる五藏山經の記事によると、まず山名をあげたあとに草木鳥獸および玉石金銀銅鉄などの産物を列挙し、かねて山々に鎮座する人面獸身の異形の神と、その神に対する祭祀の手續とをしるしてある。体裁からみれば山岳志であると同時に物産志であり、かねて山神祭祀式でもある。

記載された物産品のうち、玉の類では白玉・美玉・碧玉・琅玕・文石を産するというのが多い。吉玉とあるは山神に献ずる加工された玉である。金属では金・黄金・白金・赤金・鉄・銅などがある。玉類では原石のままでも価値ある天然の美玉を得ることはあろうが、金銀銅鉄に至っては、溪流で採取する砂金のほかは、粗鉞を得てこれを精鍊するという工程を経なければならぬのだから、この部分は鉞脈の所在を示すものと考えられる。

するとどういふことになるか。ほぼ周の都した洛陽あたりを中心にして、南西北東中の五方の山岳を跋涉し山々の物産のメモを取ったのは誰であったか。当時のいわゆる巫祝の徒であったか方士の流であったか。探査の目的も実用的な銅鉄器製造にあったか、それとも長生薬の材料を得るにあったか。これらについては確言できないにしても、実質的には山相地脈を按じ土質や岩石の色を見て鉞脈の有

無を調べる山師やましの役をも兼ねていたことになる。

山師というのは鉉脈さがしの専門技師である。山相を望見して直感でもって鉉脈の有無を鑑別するという。松本清張の「山師」と題する短篇に佐渡金山の発見について次のように書いている——

「佐渡の金山が発見されたのは、天文十一年の夏のことで、越後の舟がきて港から夜空を見るに、金銀の気空中を衝くを怪しんでからだという。石見の銀山の発見も同じようなことがいわれている。山師の間ではこれを中夜望氣の法だといっている。五月から八月の間、月の無い夜に望見すれば、金銀山なれば精氣が立昇るのが見えるというのである。金精は華のような黄赤色の金光で、銀精は雲中に竜の在るような形をしているという」。

この望氣の術というのは、かなり神秘的な鑑定法であるが、熟練した専門家となれば、多年の経験からしてそれだけの勘が働くのかもしれない。

これから連想されるのは、かの南京の紫金山の伝説である。秦の始皇の世に、この地から王氣が立昇るのを望見し、黄金を埋めてもって王氣を鎮めた、それでこの地を金陵ともよんだという。金脈を発見するというのとは逆になるが、望氣術と金銀との関係については似た話である。

金銀の鉉脈を求めて山から山を旅した山師の系統は、かの丹薬を鍊るために深山に修行した道士にも部分的には継承されたであろうが、もっと近いのは、羅針盤を携えて山相・地脈・方位を鑑定し、子孫繁栄を予約するような吉相の宅地または墓地を割り出すことを職業としたいいわゆる風水先生につ

ながる。風水または地理・堪輿・青鳥などもよばれる。科学まがいの術数の一派である。表向きは顧客の依頼に応じて墓相を鑑定するのであるが、副次的には山師の技術をも持っていたのではないか。財宝譚の有力な一類に胡人採宝譚とよばれるものがある。西域から中国にきた商人が、某地に稀世の珍宝が伏蔵することを看破し、巨額の代価をもってその秘宝を購うという説話で、後世では胡人でなくて南蛮人となり、南蛮子盗宝などとよばれる昔話である。この説話群に、なんと江西省出身の風水先生も登場するのだ。風水先生また山中の財宝を看破するだけの眼力を具えていると見られたのだ。このことは本書で所見を述べているからここには再述しないが、山師と風水師とは、胡人・南蛮子の財宝発見譚を通して隠微な一線に連なっているのではないだろうか。さらに推測すれば、『山海経』に玉石金銀銅鉄の所在を書き遺した特殊な古代旅行家の系譜にも溯ることができそうである。聴く者をして愉快ならしめる財宝発見譚というもの、その裏には説話醞釀のかなりに長い歴史があるらしい。地下鉄工事での小判発見といったニュース種程度の底の浅い話ではなかったのである。

目次

財宝談義——序にかえて——	三
洞穴の神と財宝	一三
神に借金する話	四三
出米石の伝説	六
金牛の鎖	七
異人買宝譚私鈔	一〇三
宝精篇	一四九
宝精出現の事	
金銀変幻の事	
天財地財の事	
飛錢雨錢の事	

宝精零篇 三二

銭が怖い 枕の中に金銀 船山の宝蔵 銅馬異聞

亀を踏んで金持になる話 兄弟が宝物を争う話 金銀の炎と焼耐火

金箔を撒く話 銀の筭 元宝湧出して庄死する話

銀杏の樹神と水銀 銀の種をまいて銀の実を得る話

秦始皇帝の埋蔵金 初めて金塊を見た女房の話

蟻の会話を聴いて銀を獲た話 豚が金銀の所在を教える話

竜のよだれ 三五

避債洞夜話 三四一

棺の中の銀 三四九

あとがき 二六〇

洞穴の神と財宝

一

婚礼や葬式などの不時の宴会用に膳枕の類を借りたという例の枕貸穴（または枕貸塚・枕貸石・枕貸淵）の伝説は、日本では南は九州から北は奥州まで、ほとんど全国といってよいほどに広く分布し、早くから伝説研究家に注目せられてきた。これについての解釈も、いわゆる無言貿易の古俗の伝説化であろうとか、旧家が膳枕の類を村民に貸したものであらうとか、あるいは村民共同使用の什器を一処に保管した風習があったのだらうとか、とにかく今は絶えている古い習俗を想定し、その仮説に立つてこの伝説の基盤を説こうとするものが多かったようである。

しかしこの伝説は、そうした世俗の風習、しかも有ったかどうかさえ実証しにくいような風習をもつて解し得られるものではなく、その奥底にもっと神秘的意義を蔵し、古い水の神の信仰に淵源するものであったことは、柳田国男翁が「隠れ里」（『定本柳田国男集』第六巻）で縦横に説かれたとおりで

ある。

柳田翁がまた別の文で要約したところによると、「我々の記録してゐる事実の中で、行く／＼探究の手掛りとなるべきものが幾つかある。その一つは村人の求めに応じて祝宴の日の器具を貸出したといふ場処が、大多数は淵や池又は水の流れてゐる山陰の洞などであることである。天竜川の流域では明かにこれをカハランベ、即ち川童が枕を貸したと伝へてゐる例もあるが、さうでなくとも貸す者は水の神、常は岩穴などの陰に潜まつて、凡人が姿を見るを得ない靈物としてゐることである。今一つは地の下に在る通路と邑里、そこに宮殿があり又豊富なる衣食住があつて、たまたま交通を許された者が、大抵は家富み永く榮え、旧家として久しく家柄を誇るといふことで、この点は今も流布してゐる数々の昔話、例へば斧を探しに水底に入つたとか、竜宮に遊んで乙姫の婿になり、乃至は黄金の小臼や小犬を貰つて来たといふ類の空想譚に、根となり蔓となつて結び合つてゐることである」。かくて、「島国を取繞らしてゐた海の都の信仰は、これが固有のものであつただけに、あらゆる新文化によつて侵襲せられつつも、なほ根強く残り伝はつてゐるのである」（同書第二六卷）。要するに、古来の水神信仰・竜宮信仰を基底とする伝説であつたという結論になる。

このような明快な結論が出されてしまうと、この伝説は、もはや整理済みの棚に上げてしまつて、我々にはもう何もすることがなくなつたような気がする。しかし、まだ何かの仕事が残されているのではないか。それは海を隔てて隣りする中国大陸の各地に流布する同類の伝説群との比較研究という

作業である。というのは、中国でもこの型の伝説は日本と同様に広く分布し、おそらく、どここの県にも一つや二つはあるといつてもよいほどの、ありふれた口碑となっているからである。

その伝承は日本のものと一致するかどうか。もし違ふとすれば、どこがどう違ふのか。殊に柳田翁は、海を繞らした島国固有の信仰だといわれたが、海からは遠い中国の内陸部にもあるとすれば、そう簡単に「島国固有」と断定してよいかどうか、これは一応は調べてみなければならぬ。あえて中国に伝わる槐貸穴の伝説を取りあげる所以である。

二

伝説の紹介ということは、ただ大ざっぱに「各地に広く分布する」というだけでは事が済まないもので、書くほうも読むほうも辛気くさいことであるが、やはりそれぞれの実例をあげ、伝承の地域と、語りかたの繁簡長短とを、できるだけ忠実に記しておかなければならぬ。はじめに明清人の随筆書から例を引いてみる。

廉頗れんぱの墓は趙州にあり、よく物を出して人に貸す。すべて客を招いて宴を催すとき、道具のないものは鶏や黍をもってこれを祭り、借用証を書いて焼き、夜間にいってこれを取るに、金銀磁錫および卓子椅子の類まで、証文に書いたとおり入手できる。宴が終れば再び祭って借りた器具を墓前に並べ、